

友好にとどまらぬ首相訪中

来る十二月五日に大平首相は、大来外相とも訪中することに決めた。第二次大平政権の誕生が、わが国政治の転機をさらけ出した。よき経緯をたどったあとと受け、首相としては訪中を機に心懸を一転、新しい大平政治の方向を確立したいところであろう。今回の首相訪中は、日中間に起こる緊急を要する政治的・外交的事項が存在しないだけに、「四つの現代化」政策へと大きく転換した中田側の

際立つ「日ソ」立ち遅れ

中 嶋 嶺 雄



首脳と藤(ひぎ)を交えて話し合うことにより相互理解と日中友好関係の増進をはかるのが目的だとされている。

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

思えば、昨夏の日中平和友好条約の締結以来、アジアの国際政治は、言わぬまでも激しく流動した。越前条約の締結、米中国交復立、中越戦争、中ソ友好同盟条約の発効、中ソ次官級モスクワ会議の開催、朴・鍾武大統領訪日など重要な国際的事件が相次いだ。これらの一連の出来事は、アジア・太平洋地域における米・日・中の「反霸権」連合形成への衝動とそれに對抗するソ連の軍事戦略の著

明白に「軍事拒否」を

従って、大平首相が北京における演説で、このようなわが国の軍事的なコミットメントを明白に拒否しようとする姿勢を注すと

民間ベース主導型ではなく、まず政府ベースの協力が優先すべきものと考えているが、たとすれば、やはりそれなりには明白な理由づけ、つまり大義名分が必要である。それは中田周辺のアジア諸国やソ連にたいしても必要であるばかりか、この財政緊迫の折柄、巨額の国費を用いのであるから、まず日本国民の納得がゆくものでなくてはならない。この点で大平政権は、適正なる大義名分を見いださず、得ていないのである。

しい拡大をもちあわす、新しい冷戦としての「生ぬるい戦争」の「C・W・」のグローバルな遊を背景にしているといえる。

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

拒否しようとする姿勢を注すと、たとしても総額二十五億、余に及ぶ借款は、わが国としても最初

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

たとしても総額二十五億、余に及ぶ借款は、わが国としても最初

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

拒否しようとする姿勢を注すと、たとしても総額二十五億、余に及ぶ借款は、わが国としても最初

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

拒否しようとする姿勢を注すと、たとしても総額二十五億、余に及ぶ借款は、わが国としても最初

新しい冷戦 背景

だが、今回の首相訪中は、まさにそれが七〇年代最末期に表現することによって、八〇年代アジアの国際政治の幕開けを告げざるを得ないことだ。日のわが国の国際的地位に照らして避けられないことだ。

(東京外大教授)